

# ジョン・ダン：“The Exstasie”の構造

朝 倉 秀 之

A. J. Smith がジョン・ダンの“*The Exstasie*”について書いたのは1958年であった。この詩はダンの詩の中で一番議論の対象になって来た詩<sup>1)</sup>である。Smith は“*The Metaphysic of Love*”の中で R. Tuve がダンを驚くべき文学革命家として考えるあまり、実際そうであった以上に難しくしてしまった、と言った後で次のように付け加えている。「やっと全体的にも気付き始めているが、我々のこの詩人に対する基本的役目は十分に文学的技法の流れを明確にして、具体的資料を辿ることである」と述べている。彼は“*The Exstasie*”を a witty poem として読み、Ebreo の metaphysic of love との関係だけでなく、16世紀イタリア思想家の理論との関係を明確にした。技法の流れを明らかにするために、Ficino の純粹理想主義から Aristotle と Aquinas の思想に基礎を置いた経験主義にいたるまでの理論を展開している。ダンが実際に Ficino, Ebreo, Speroni, Varchi, Tullia d'Aragona, Betussi, Tasso などを読んだかどうか証拠はないとしながらも Smith は明らかにダンはその思想を受けた者であるし、Neo-Platonists の具体的資料を利用したとしている。

“*The Exstasie*”を詳細に述べているのは H. Gardner と A. J. Smith であるが、この二つの論文によって論争に一区切りがついたことも確かである。その後、D. Novarr がこの2つの論文に詳細な検討を加えていて、私はこの論文に負うところが多い。“*The Exstasie*”の中で問題になって来たことは、ダンがこの詩を sincerity を持って書いたのか、ということである。Gardner は‘*The Argument about “The Ecstasy”*’の中で Grierson から Pierre Legouis, M. Y. Hughes, C. S. Lewis, F. Kermode, M. Praz を取り上げ、その詩の論争の歴史と問題点をまとめている<sup>2)</sup>。この小論では問題になっている点について答えると同時に“*The Exstasie*”の構造を明らかにし、この詩が持つ特徴について特に Gardner と Smith に沿って論ずることとする。

Gardner は“*Exstasie*”を意図的に全体的に「まじめな」ものと見ている。肉体を捨てることによって得られるその欲望の対象と魂が結合する時の Neo-Platonists の概念を想像してその本質

注1) Helen Gardner, ‘*The Argument about The Ecstasy*’, in H. Davis and Helen Gardner (ed.), *Elizabethan and Studies Presented to F. P. Wilson*, Clarendon Press, 1959, 270-306. M. Y. Hughes, ‘*The Lineage of The Ecstasy*’ *MLR*, XXVII, 1932, 1-5. M. Y. Hughes, ‘*Some of Donnes, “Ecstasis”*’, *PMLA*, LXXV, 1960, 509-18. A. J. Smith, ‘*The Metaphysic of Love*’, *RES* n.s. LX 36, 1958, 362-75. E. M. W. Tillyard, ‘*A Note on Donne’s, Ecstasy*’, *RES*, XIX, 1943, 67-70. D. Novarr, *The Disinterred Muse*, Cornell Univ. Press, 1980.

注2) This point of disagreement is whether the justification is seriously ment (and, if so, is it to be taken seriously or is it worthless), or whether the whole argument is intentionally sobsticated and the poem shows somebody ‘being led up the garden path’. p.280.

## 朝 倉 秀 之

をダンが述べようとしている、と言う。GardnerはSmithとは違ってLeone EbreoのDialoghi d'Amoreから‘amorous ecstasy’の概念を直接取ったと考えている。そして、Ebreoのecstasyの中のsemi-deathをこの“The Exstasie”の解釈に使っている。Gardnerによると、恋人たちのecstasyは“The Exstasie”の48行まででclimaxに達している。GardnerはEbreoの愛の循環の教義に言及することで恋人たちが肉体に戻ることを正統化しようとする。劣等のものは優等なものと同様に愛で結ばれたいと願うが、優等のものも劣等のものと同様に愛で結ばれたいと願う。下位のもの、それが欠けている完全を願い、上位はそれが欠けている完全を補いたいと思うのだとGardnerはEbreoを引用する。さらに、血は精神になりたいと努め、精神や魂の力を生みたいと努める。その力は人間の中の知的なもの、肉体的なものを結びつけるのに必要である。逆に魂は人間の感覚の器官が正しくなるために肉体の‘affections’と‘faculties’に下りて行かなければならない。魂の義務は永遠の世界から滅びの世界へ下ることであり、この聖なる機能を持った魂は全ての部分で肉体を動かさないなら、その魂は獄の中の王になってしまう、とダンの詩を引用する。Gardnerは最後の連をこの世の生活を正統化するものとして読む。

Gardnerの意見によれば、詩の最後のセクション（第13連から第19連まで）の誤読から全ての議論が起って来たと見ている。

But O alas, so long, so far

Our bodies why do we forbear?

(11. 49~50)

To'our bodies turne we then, that so

(1. 69)

when we'are To bodies gone.

(1. 76)

この流れは明白で主要な意味を持っていて、これを把握しなければ、付帯の意味も他の意味も理解できないと言う。「しかし、ああ、なぜぼくたちはそんなにも長く、そんなにも遠くに肉体を遠ざけるのか」「さあ、だからぼくたちの肉体へ帰ろう」「その時、ぼくたちは肉体に帰ってきている」の流れは、どうみても恋人たちに利益となるというより、肉体の中でのみ彼らは‘弱い人間’に愛を表わすことが出来るということにある。ダンの‘Platonic’の詩の中で、恋人たちは‘saints of love’であり、秘跡や愛の神学の学者たちを理解することができる。一般の人たちは、目に見える教えが必要であるとしている。恋人たちが肉体に戻っているのを見るために招かれるという事実によってこの詩が‘immodest proposal’の中で最高潮に達するという考えを全く不可能にすると言って、Gardnerは‘immodest’という言葉に反対している。Gardnerは“The Exstasie”の中にダンが目的をどれほど達成したかを求めるとき、この詩が他のlove poemsと比べてmetrical interestとvarietyの欠如が著しいと見ている。詩の主題をはずれて、恋人たちの話を

通して議論をしている感じがある。その理由は、論点が作られ目的が設定されているからだと言う。ダンはまだ *ecstasy* の概念にそんなに深く動かされていたとは思わない、とも付け加える。Gardner によると、ダンが当時 *Ebreo* を発見した結果から書いたからそのような欠陥を生んでいることを説明する。それにもかかわらず Gardner はダンが *ecstasy* についてはまじめに書いていると重ねて主張する。Gardner は “The Exstasie” がダンの最も偉大な *love poetry* の鍵を持っていると考えているからダンの詩の中の工夫と真摯さを弁護するために意図は全体にまじめなもの、慎みのない単なる求愛の詩ではないと見る。

Smith の関心は “The Exstasie” の中に16世紀イタリアの思想家たちの立場をどのように取り扱っているかを見ることである。ダンの時代の英国での状況を踏えながらどんな風に *witty poem* にしたかを考察することであるとする。しかし、“The Exstasie” の愛の理論に対するダンの貢献度は大きくはないとしている。上手に資料を使っているし、関心を持つのは何を使ったかということより、どのように使ったのかということである。ただ Smith は詩の最後の連 (11, 73~76) を愛の奥義の喜劇的な白科を使うことで締め括っているとしている点である。すなわち肉体的結合は基本的結合の印として形成されているという考えが、器用に使われてある。その論点が最後に来て妥協が見えるし、その効果を減少させてしまっているというのである。この点については別の意見を述べてみたい。

Gardner がダンに持つ不満にしても、Smith の *wit* の述べ方にしてもどちらもダンの “The Exstasie” の魅力を十分に弁護していないように思われる。それは George Williamson が言ったような意味<sup>3)</sup> で十分に *wit* が述べられていない。ダンは思想と感情の *paradoxes* を発展させたり、使用する手段として論理を使うが、“The Exstasie” の *wit* のような微妙な議論中にも人を驚かせるものがある。それを論ずることで “The Exstasie” の魅力を弁護したい。表現されたものが予期しない形態をとり、予期しない意味に発展する。それが *wit* と洞察力を生み、感情の皮肉な面を伝える。いわゆるダンの中で *conceit* と呼ばれる機能である。

さて “The Exstasie” は19連から成っている。第1連から第7連 (11, 1~28)、第8連から第12連 (11, 29~00) 第13連から第19連 (11, 49~76) までの劇に譬えるならば3幕に分けられる。先ず幕が上ると、舞台には二人の男女の若者。董が咲いている土手に座っている。二人の手は固く結ばれたまま、糊づけになったように汗が滲んでいる。二人は凝っとお互いの目を見詰め合っている。二つのことだけ、すなわち手をつないでいることと目を見詰め合うことをしているだけで時をすごしている。観客は突然二人の恋人たちの魂が肉体を離れるのを見ることとなる。二人

注3) G. Williamson, *The Proper Wit of Poetry*, Faber & Faber, 1961 p.32: ‘His argument is comonly employed as a mode of surprise rather than of persuasion, as in his prose paradoxes; its end is to point or magnify his emotion rather than to prove them’.

## 朝 倉 秀 之

の魂は肉体を出たあと宙ぶらりんになって空中で何かを話している間、肉体だけになった恋人たちは墓の上の石像のように横たわっているのを知る。とにかく石像として動かずじっとしている状態である。口は閉じたままである。一日中。魂だけが会話を交している状態である。観客にはその会話は分らない。第6連、第7連(11, 21~28)には驚くべきことに特別な聞き手が、横わって何も言わない二人の間に佇むために登場する。夢の中の妖精のように特別な愛の精錬を受けて、魂の言語が聞き分けられるようになっているが、二人の魂は意見が異ならないで、1つのことを話しているからどちらの魂の意見かわからない。そこで新しい昇華作用を受けて、登場したときよりもっと純化されて帰って行く。2幕目になると中心的主題である *ecstasy* の世界に舞台は変っている。突然の驚きとして観客には伝わる。この素晴らしく輝かしい愛の世界は恋人たちに愛するものは何かを教える。それは哲学者や宮廷の人々が探し求めていた愛の世界なのである。現実には観客には何が起っているのか分りにくい。魂自体も愛によって混ぜ合わされてしまってどちらがどちらか分らなくされてしまっている。そして1本の董にスポットが当たり、その董が移植されて増殖されて行くのが見えるのと同時に、2つの魂が愛によって別の力強い魂となるのを見る。

When love, with one another so  
Interinanimates two soules,  
That abler soule, which thence doth flow,  
Defects of lonelinessse controules.

Wee then, who are this new soule, know,  
Of what we are compos'd, and made,  
For, th'Atomics of which we grow,  
Are soules, whom no change can invade.

(11. 41~48)

1幕の第4連で恋人たちの肉体を飛び出した魂は2幕の第11連で力強い魂となって孤独という欠点を克服する。この力強い魂はそれ自体で完全で不変である。2つの魂が1つに成って、ひとりの対話をする事が出来る。これも面白い発想であるが、最後の第19連でこの魂のことが描写される。3幕になると魂から見た肉体のことに話は変る。Smithは1幕の中に3幕の動機づけを見ていたし、'as yet'(1, 9)に注目している。新しくなった力強い魂は長い間、肉体を離れている。何故避けているか、魂が肉体そのものでないにしても肉体は魂のものであるのにと問う。この第13連からは非常に雄弁になる。「ぼくら(魂)は叡知なる天使、肉体はその天球である」天球がなければ天使も働くことができない。そのような力や感覚を与えてくれるのが肉体なのだ。肉体は避けたり、捨ててしまったりする屑('drosse')ではなく合金('alloy')なのだ。そして3幕の

2場とも言うべき第15連に入る。ここでは魂と肉体との関係がたくさんの比喩を用いて述べられる。力強い魂がそれを説明する形をとっているが、先ず人間に関心があることを明らかにする。人間という言葉は3幕で3回出て来る。人間に対する天の影響は直接及ぶのではなく間接的に及ぶのである。天の影響は最初空気に作用する。魂に流れ込んでくる魂も先ず肉体を通して始めて出て来ることが出来るのである。だからその意味でも肉体は大切なのである。ダンはここで古典的資料を使って説明しているが、肉体の中にある血も魂にできるだけ近い精気を生み出そうとし、といると言う。力強い2つが1つになった魂を人間にするのには精妙な結び目（‘that subtle knot’）を作る指が必要だと説く<sup>4)</sup>。血は感覚と魂を結んで人間にすることの出来るさらに純粋な元素を生み出すために上昇しなければならない。そのような純粋な恋人たちの魂は感覚が届き、理解できる感情と肉体の働きのところへ下降しなければならない。

So must pure lovers soules descend  
 T'affections, and to faculties,  
 That sense may reach and apprehend,  
 Else a great Prince in prison lies.

そうでなければ力強くなった魂も牢獄にいる王様のごとく権力をふるうことが出来ない。そして“*The Exstasie*”の一番の盛り上りを迎える。

To' our bodies torne me then, that so  
 Weake men on love reveal'd may looke,  
 Loves mysteries in soules doe grow,  
 But yet the body is his booke.

今こそ肉体に戻ろう、と力強い魂になっている恋人たちの魂は言う。そして愛の秘跡をいつも証拠を求め弱く人々に知らせよう。力強い魂が愛の秘跡の伝道者となって一般の人々に伝えようとしている。愛の秘跡は恋人たちの魂の中で起るのだけれど、人間は肉体という書物によって真理を学ぶのである。そして最後の第19連となるが、第6、7連で登場した特別な聞き手がいて恋人たちの魂の会話を聞いてみれば、魂たちが肉体に戻っていてもその変化にはほとんど気づかないはずだと言うのである。この箇所は議論を呼んだところであるが、この小論の結論としては魂と肉体の関係の関係を明確にすることが強調されているということである。ダンは愛の哲学や16

注4) ‘In the constitution and making of a natural man, the body is not the man, nor the soul is not the man, but the union of these two makes up the man; the spirits in a man which are the thin and active part of the blood, and so are of a kind of middle nature, between soul and body, those spirits are able to do, and they do the office, to unite and apply the faculties of the soul to the organs of the body, and so there is a man’ (Donne, Sermons II, 261-2).

朝 倉 秀 之

世界の思想家の影響受けたことは全く疑いの余地がないだろうが、その中での wit に注目しなければならない。Smith が言うような喜劇的な白科ではなく、消極的に見える第19連は “The Undertaking” の中の話し手の白科と合わせて考えなければならない。

And if this love, though placed so,  
 From prophane men you hide,  
 Which will no faith on this bestow,  
 Or, if they doe, deride :

Then you'have done a braver thing  
 Then all the *Worthies* did,  
 And a braver thence will spring,  
 Which is, to keepe that hid.

(11, 21~28)

普通この世の中では愛の秘跡だなどと言ってもあざわらうはずだから、そのときこそ世の賢者たちより素晴らしいことをしたことになる、と “The Undertaking” の話し手は言う。その理由はその愛の秘跡を世に秘めることによってもっと素晴らしいことが生じる、という箇所と共に読む時に喜劇的ではない witty な面が出て来るのではないかと思う。また観衆（読み手）の立場によって wit の質は変わってくるかもしれない。ダンはこの詩が回覧されて読まれる時の効果を十分に計算していたに違いない。ダン自身が長いキリスト教の伝統の中で魂が牢獄としての肉体に捕えられていると考えていて、自分の中の ascetic な面, hedonic な面に向けても書いているのである。

最初の問題点に帰ると、ダンは “The Exstasie” の中で ‘sincerity’ であるのかという問は、結局のところ肉体の復権ということを主強している点で ‘sincerity’ を持っていると思う。この詩の議論全体は一貫性があるし、効果的である。

“The Exstasie” は “The Good-morrow” や “A Valediction : forbidding Mourning” のような相思相愛の詩ではない。しかし、ダンがこの詩の中で融合としての愛の概念にとらえられていたことは否定できないし、それが1人だけから取ったものではないことも確かであろう。ダンの love poems の中でこの “The Exstasie” が特色の1つを持っているのは、その主題とその内容に含まれた wit なのではないだろうか。

テキスト及び参考文献

- A. J. Smith (ed.), *John Donne : The Complete English Poems*, Penguin Books, (1971, rpt 1986)
- Helen Gardner (ed.), *John Donne : The Elegies and The Songs and Sonnets*, Clarendon Press, 1965.
- G. R. Potter and E. M. Simpson (eds.), *The Sermons of John Donne*, Univ. of California Press, 1953-61.
- J. Bennett, *Five Metaphysical Poets*, Cambridge Univ. Press, 1963.
- Helen Gardner, ‘The Argument about *The Ecstasy*’, in H. Davis and Helen Gardner (eds.), *Elizabethan and Studies Presented to F. P. Wilson*, Clarendon Press, 1959.
- M. Y. Hughes, ‘The Lineage of *The Ecstasy*’, *MLR*, XXV II, 1932, 1-5.
- M. Y. Hughes, ‘Some of Donnc’s, “Ecstasis”, *PMLA*, LXXV, 1960, 509-18.
- P. Legouis, *Donne the Craftmen*, Henri Didier, 1928.
- D. Novarr, *The Disinterred Muse*, Counell Univ. Press, 1980.
- A. J. Smith, *John Donne : The Songs and Sonnets*, Arnold, 1964.
- A. J. Smith, ‘The Metaphysic of Love’, *RES* n.s., LX 36, 1958. 362-75.
- G. Williamson, *The Proper Wit of Poetcy*, Faber and Faber, 1961.